身近な自然が教材となる

森林を活用した教育

教育の場として森林が活用されていることをご存知でしょうか。市では平成5年から、小学生を対象とした「森林体験学習」を行っています。自然と近い立地を生かした原体験を伴う学習として、小学校、市産業振興課、市教育委員会、大阪府、地域の方々、そして平成14年からは大阪教育大学が協力して実施しています。夏季には葉っぱや土の観察、冬季にはぶどうのつるなどを使ったリース作り、間伐体験、落ち葉を集めて中に入る「落ち葉のお風呂」などさまざまな取組みを行っています。今年度は、4つの小学校が体験を実施しました。

▲落ち葉のお風呂で遊ぶ子どもたち

自然と笑顔があふれる

堅下南小学校では「落ち葉のお風呂」と「リース作り」が行われました。最初は慣れない様子の子どもたちでしたが、ひとたび落ち葉の中に入れば夢中になって遊んでいました。

班のリーダーとして参加していた大阪教育大学の学生は、「普段とは違う子どもの様子が見られることや、校外での子どもの安全管理など、とても勉強になります」と話しました。外での活動はケガなどの危険が伴いますが、大学生が各班に付いていることが、安全性の向上にも繋がっていました。

担任の先生は「自然の中では子どもの新たな一面が見られます。自然の移り変わりを肌で感じることは有意義だと思います」と話しました。子どもたちも五感を使って楽しく学んだようで、「草の良い匂いがした」「ちょっと臭い」「チクチクする」「触るとくしゃっとした」「また来たい」と自然の中ならではの感想を笑顔で話してくれました。

▲子どもたちを見守る大学生

▲堅上小学校の間伐体験の様子

森林体験学習の効果

以前、森林体験学習を行った児童たちにアンケートを実施したところ、さらに知りたいこととして「木の年輪のでき方」「木の種類」「生き物を調べたい」などの回答があり、自然科学に興味を持つきっかけとなると分かりました。また、「大学生や友達との共同作業にも楽しさを感じる」という回答から、他者と関わり協力することへの興味関心の促進にもつながっていると考えられます。

体験の一期生だった小学生が、本学の大学生となって戻ってきてくれたことがありました。在学中は森林体験学習のリーダーとして活動し、現在は理科の教諭となっています。まいた種の1つが咲いてくれたように感じました。

大阪教育大学
理科教育講座准教授
岡崎純子さん